

## ダニエル書 - 第113番

預言の三重適用を解き明かす：聖書的文脈における2001年9月11日の意義を理解する

Jeff Pippenger

2024-03-03

主が2001年9月11日にエレミヤの言う『いにしへの道』へと終末の民を導き戻したとき、主はすでに預言の三重適用の原則を明らかにしておられた。

主はこう言われる。道の分かれ道に立ち、見渡し、昔からの道、どこに良い道があるかを尋ね、その中を歩め。そうすれば、あなたがたは魂の安らぎを見いだす。しかし彼らは、「私たちはそこを歩まない」と言った。また、私はあなたがたの上に見張り人を立て、「ラッパの音に耳を傾けよ」と言った。しかし彼らは、「私たちは聞かない」と言った。エレミヤ書 6:16、17。

主がご自分の民を昔からの道に立ち返らせたとき、彼らは安息（後の雨）を見だし、そのとき見張り人たちにはラッパのメッセージが与えられた。すべての預言者は終わりの時代の終わりをきわめて明確に示しているため、終わりの時代のラッパのメッセージは最後のラッパ、すなわち第七のラッパであり、これは第三のわざわいである。

彼の最後の時代の民が古き道のうちを歩み始めたとき、第一の災いの特徴が特定の象徴的な歴史上の指導者（ムハンマド）を指し示していること、そして第二の災いも同様に（オスマン）を指し示していることが認められた。さらに、最初の四つのラッパのそれぞれにも、そのラッパを特定する象徴的な指導者がいることが見いだされ、その後、第三の災いの象徴的指導者がウサマ・ビン・ラーディンであると認識された。

モハメッドはアラビアと結び付けられており、オスマンはトルコのオスマン帝国の象徴で、オサマ・ビン・ラディンは世界的なイスラム教のテロを象徴していたが、彼もモハメッドと同様にアラブ人であった。

また、第一のわざわいがローマの軍勢に打撃を与え、第二のわざわいがローマの軍勢を壊滅させたことも認識された。その後、2001年9月11日は、第三のわざわいとしてのイスラムがローマの軍隊（アメリカ合衆国）に打撃を与えた時点であると認識されたが、日曜法においては、それがローマの軍隊を殺すことになる。すなわち、アメリカ合衆国が聖書の預言における第六の王国として終焉を迎え、竜と獣と偽預言者の三重連合に国家主権を明け渡すのである。

アメリカ合衆国は、力の二本の角をもつ地の獣であると認識された。地の獣の預言的な主要な特徴は、小羊から竜へと変わることであり、預言的には角は力を表し、地の獣の力は共和主義とプロテスタント主義であり、地の獣の二本の角として表されている。しかし今や終末の時代には、地の獣の二つの力は軍事力と経済力へと変わった。2001年9月11日、第三のわざわいのイスラムが、地の獣の象徴である地、軍事力の象徴であるペンタゴン、そして経済力の象徴であるニューヨーク市のツインタワーを攻撃した。

また、第一の災いの始まりの歴史と第二の災いの終わりの歴史が、いずれも十四万四千人への封印を例証していると認識されたとき、第三の災いが到来し、ニューヨークの巨大な建物が打ち倒されたときには、十四万四千人への封印の過程が始まっていたことが確認された。

「いま、私がニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ているのですか。私はそのようなことは一度も言っていません。そこに次々と階を重ねて建ち上がっていく巨大な建物を見ながら、私はこう言いました。『主が立ち上がり、この地を激しく揺り動かされる時、どれほど恐ろしい光景が起こることだろう！そのとき、黙示録18章1節から3節の言葉が成就するだろう。』黙示録第18章全体は、この地上に臨もうとしている事柄への警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかについて、私には特別な光は与えられていません。ただ、いつの日か、そこでそびえる大建造物が、神の力によってひっくり返され、打ち倒されることは知っています。私に与えられた光によって、私は世に破壊があることを知っています。主のひと言、全能の力のひと触れによって、これらの巨大な建造物は倒れるのです。私たちの想像を絶するほどの恐ろしい光景が起こるでしょう。」 Review and Herald、1906年7月5日。

「世にある滅び」はイスラム教の性質である。というのは、その性質は『ヨハネの黙示録』9章11節でアポリュオンとアバドンとして表されているからである。

そして、彼らの上に君臨する王がいた。その王は底知れぬ淵の天使であり、その名はヘブライ語でアバドン、ギリシア語ではアポリオンと呼ばれる。ヨハネの黙示録9:11（ナイン・イレブン）。

ヘブライ語とギリシャ語という二つの名で示されているとおり、イスラムを支配する王の名、または性質の意味は「死」と「滅び」であり、それは2001年9月11日、ニューヨークの巨大な建物が打ち倒されたときに到来した。その時点で、『黙示録』第18章1節から3節が成就し始めた。

創世記におけるイスラムの野人への最初の言及では、「アラビアの野ロバ」を意味するヘブライ語が用いられており、その節では「野人」と訳されていることが認められていた。イスラムの象徴は馬の類であり、黙示録第九章では軍馬としても表されていた。「変更してはならない」と神の民に知らされていたハバククの聖なる図表においても、イスラムは軍馬によって表されていた。

主の御使いは彼女に言った。「見よ、あなたは身ごもっており、男の子を産む。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞かれたからである。彼は荒々しい人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手も彼に逆らう。彼はすべての兄弟たちに向かい合って住むであろう。」創世記16:11、12。

イシュマエルの誕生が最初に言及された際、それは「自制」と結び付けられ、この「自制」はのちにイスラム教と結び付けられる主要な象徴となった。

さて、アブラムの妻サライは彼に子を産まなかった。彼女にはエジプト人の侍女がおり、名はハガルであった。サライはアブラムに言った。「ご覧ください。主が私に子を産ませることをお許しにならないのです。どうか私の侍女のところにお入りください。

もしかすると、私は彼女によって子を授かるかもしれません。」アブラムはサライの言うことに従った。創世記16章1、2節。

イスラムについてのまさに最初の言及、すなわちイシュマエルの誕生において、服従が強調されている。服従という概念はイスラム教の根本である。「イスラム」という語は、「平和」を意味するアラビア語の“salaam”と、「服従する」あるいは「降伏する」を意味する“aslama”の二語に由来する。イスラム教は、信徒が人生のあらゆる側面において自分の意志をアッラー（神）の意志に服させるべきだと教える。サラは、アブラハムにハガルを迎え入れてイシュマエルをもうけさせた自分の判断が誤りだったと気づくと、アブラハムからハガルを厳しく扱う許可を得た。そのため、ハガルはアブラハムの家を逃げ出した。そこで彼女は天使からの告げを受けた。

しかしアブラムはサライに言った。「見よ、あなたのはしためはあなたの手の中にある。あなたの良いと思うとおり、彼女にしなさい。」サライが彼女を厳しく扱ったので、彼女はサライの前から逃げた。主の使いは、荒野の水の泉のほとり、シュルへ向かう道にあるその泉のそばで彼女を見だし、こう言った。「サライのはしためハガルよ、あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか。」彼女は言った。「女主人サライの前から逃げているのです。」主の使いは彼女に言った。「あなたの女主人のもとに帰り、その手の下に身を低くして従いなさい。」主の使いはさらに彼女に言った。「わたしはあなたの子孫を大いに増やし、数えきれないほど多くしよう。」主の使いはまた彼女に言った。「見よ、あなたは身ごもっており、男の子を産もう。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞かれたからである。彼は野郎ばのような人となり、その手はすべての人に向かい、すべての人の手は彼に向かう。彼はすべての兄弟たちの前に住むであろう。」創世記16:6-12。

イスラムの抑制、イスラム教という宗教の性格を表す「服従」、そしてイスラムの役割は、すべてイシュマエルへの最初の言及の中に見いだされ、『黙示録』の三つの災いによって表されているイスラムの預言的なDNAを示している。主がご自身の民をエレミヤの「古き道」へと導かれたとき、彼らはまた、『黙示録』第七章で四人の天使によって抑えられている「四つの風」が、まさにイスラムの四つの風であることを認識した。

「天使たちは四つの風を押さえている。それは、枷を振り切って全地の面を駆けめぐろうとする怒れる馬として表され、その進むところには破壊と死がもたらされる。」『原稿集』第20巻、217ページ。

イスラムの「怒れる馬」は、十四万四千人の封印が成し遂げられている間に抑えられている「四つの風」でもあり、彼らの「道」には「死と破壊」（Abaddon と Apollyon）をもたらす。Hagar に課された抑制が、イスラムの象徴の中にその預言的性質を置いたのと同様に、「四つの風」と「怒れる馬」もまた抑えられている。そしてその事実があるがゆえに、第一の災いの始まりは、Abubakar の歴史的命令によって表されるイスラムへの抑制を示すものだと認識された。

そして彼らには、地の草にも、何の青草にも、どんな木にも害を加えてはならないこと、ただ額に神の印のない人々だけを害するようにと命じられた。黙示録 9:4

行に行を重ね、三つの災いの三重の適用において第一の災いの始まりに重ね合わされている第二の災いの始まりは、四人の天使の解放を示しており、その四人の天使は、その節においてイスラムの第二の大ジハードが解き放たれることを表している。

ラッパを持っている第六の天使に言った。「大いなる川ユーフラテスにつながれている四人の天使を解き放せ。」黙示録9:14

したがって、第三の災いの初めに、イスラム教は解き放たれると同時に抑制されると理解されたが、これはまさにホワイト姉妹の証言そのものである。

その時、救いの働きが終わろうとしている間に、地上には患難が臨み、諸国民は怒るが、第三天使の働きを妨げないように抑えられる。その時、「後の雨」、すなわち主の御前からの潤いが下り、第三天使の大いなる叫びに力を与え、最後の七つの災いが注ぎ出される時期に堅く立てよう聖徒たちを備える。『初期の著作』85.

イスラムの歴史的記録を調査すると、第一の災いにおけるアラブ・イスラムの戦闘とその成果は、イスラムでは「第一の大ジハード」と理解され、また、四人の天使が解き放たれたときに始まったオスマン帝国の戦争は「第二の大ジハード」と理解されていることが分かった。三重の適用に一致して、イスラムは第三にして最後の大ジハードが2001年9月11日に始まったと信じている。かつてウィリアム・ミラーが書いたように、「歴史と予言は一致する」。

第一と第二の災いの始まりに関する予言の線を互いに重ね合わせることで表される、「解放と同時の拘束」という“line upon line”の適用は、預言の霊によって完全に確証された。そして2001年9月11日にイスラムが攻撃した直後、ジョージ・W・ブッシュ大統領は対テロ戦争を開始することで、イスラムに世界的な拘束を課した。イスラムという「怒れる馬」の同時的な解放と拘束は、聖書、預言の霊、そして歴史によって確認された。

『小羊に従って』ミラー派の古き道に立ち返る者たちは、「安息」、すなわち「後の雨」を見いだす。これは、列国が怒りつつも押しとどめられているとき、すなわち2001年9月11日のときのように始まるとホワイト姉妹が指摘している。

その時、救いの働きが終わろうとしている間に、地上には患難が臨み、諸国民は怒るが、第三天使の働きを妨げないように抑えられる。その時、「後の雨」、すなわち主の御前からの潤いが下り、第三天使の大いなる叫びに力を与え、最後の七つの災いが注ぎ出される時期に堅く立てよう聖徒たちを備える。『初期の著作』85.

「小羊に従い」ミラー派の古き道に立ち返る者は、「安息」、すなわち「後の雨」を見いだす。これは、ホワイト夫人が、2001年9月11日に黙示録18章の力ある天使が降りて来たときに始まると特定しているものである。

後の雨は神の民の上に降り注ぐ。力ある天使が天から下ってきて、全地はその栄光で照らされる。『Review and Herald』1891年4月21日。

その力ある天使は、ニューヨークの建物が倒壊し、十四万四千人の封印が始まり、後の雨が降り始めたときに降臨した。エレミヤの「昔からの道」に立ち返るよう導かれ、「憩い」（すなわち後の雨）を見いだした者たちは、やがて、イザヤの「憩いと潤い」もま

た後の雨であると認めましたが、同時にそれは、2001年9月11日に神の民、ことに「エルサレムを治めていた」「あざける者たち」に突きつけられた試練を指し示すものでもあった。彼らは、その試練が二重のものであることを悟った。というのも、それは第三の災いに関するイスラムのメッセージを表していると同時に、同じくらい重要なことに、後の雨のメッセージを打ち立てた聖書的手法をも表していたからである。

彼は彼らに言われた。「これは、あなたがたが疲れた者を休ませる安息であり、これは憩いである。」しかし、彼らは聞こうとしなかった。しかし、主の言葉は彼らには、戒めに戒めを、戒めに戒めを、規則に規則を、規則に規則を、ここも少し、そこも少し、となった。彼らが出て行って、うしろに倒れ、打ち砕かれ、わなにかかって捕らえられるためである。それゆえ、エルサレムにいるこの民を治めるあざける者たちよ、主の言葉を聞け。イザヤ書 28:12-14.

古き道を歩むことによって、神の終末の民は、「アドベンチストの民の経験を描いている」十人の乙女のたとえが、十四万四千人の封印の時に「文字どおり」繰り返されるべきであることを見いだした。そのたとえが初めて成就した歴史の証しは、ハバクク書2章がそのたとえに直接結びつき、その一部であることを示した。ゆえに、ハバクク書2章の「論争」は、嘲る者たちが聞こうとしなかった安息と潤いに関する試練を表していた。忠実な聖書研究者たちが古き道を探究し続けるうちに、十人の乙女のたとえとハバクク書2章が同じ預言であるだけでなく、エゼキエル書12章もまた同じであることを気づいた。

エゼキエルの預言の一部もまた、信者たちにとって力と慰めの源であった。「主の言葉が私に臨んだ。人の子よ、イスラエルの地であなたがたが、『日は長引き、すべての幻は実現しない』と言っている、そのことわざは何か。だから彼らに言え。主なる神はこう言われる。……日は近い。すべての幻の成就も近い。……わたしは語る。わたしが語る言葉は成就し、もはや延ばされることはない。」——「イスラエルの家の者たちは、『彼の見る幻は多くの日の後のことで、彼は遠い時のことを預言している』と言っている。それゆえ、彼らに言え。主なる神はこう言われる。わたしの言葉はもはや一つとして延ばされることはない。むしろ、わたしが語った言葉は行われる。」エゼキエル書 12:21-25、27、28 大争闘 393頁

1840年から1844年の再臨運動によって象徴されている十四万四千人の封印の時期は、終わりの日に『すべての幻の効験』が『成就する』時期を表している。第一の災いの預言的歴史を第二の災いの預言的歴史に重ね合わせると、第三の災いの預言的歴史が明らかになり、これは十四万四千人の封印の預言的歴史である。それはまた、1840年から1844年の歴史でもある。それはまた、契約の使者のために道を備える使者の働きが成し遂げられる歴史でもある。それは、地からの獣の二つの角が、第六から、『七つのうちの一つである』『第八』へと移行していく歴史でもある。それはまた、黙示録11章で二人の預言者が通りで殺される歴史でもある。

しかし同じくらい重要なのは、神の言葉は決して失敗しないという事実と、すべての預言者は他のどの時代よりも終わりの日々について多く語っているという原則を合わせ考えると、2001年9月11日には「預言の日々は目前にある」、すなわち神が語られた「言葉は成就し」「それはもはや遅れることはない」という時が来た、ということである。

1863年の反逆によって、ラオデキア的アドベンチズムは、彼らが皆死に絶えるまで荒野をさまようことに定められた。主は、カデシュで古代イスラエルに対してなされたように、2001年9月11日にその歴史に戻って来られた。

最初のカデシュへの訪れは十人の斥候の反逆を引き起こし、荒野をさまよう時期をもたらした。四十年の終わりに彼らはカデシュに戻り、そこでモーセは岩を二度目に打ち、約束の地に入ることを禁じられたが、彼らはヨシュアとともに入った。2001年9月11日は最後の世代を指し示し、神はもはや御言葉を引き延ばされない。

次の記事でこの事実を取り上げます。

イスラエルの荒野での生活の歴史は、時の終わりに至るまで神のイスラエルの益となるように記録された。荒野をさまよう者たちに対する神の取り扱い、彼らのあちこちへの行軍においても、飢え、渇き、疲労にさらされたときにおいても、また彼らを救うためにその力を驚くべき形で現されたときにおいても、神からのたとえであり、あらゆる時代の神の民に対する警告と教訓に満ちている。ヘブライ人の多様な経験は、彼らに約束されたカナンに住まいに備えるための学校であった。神は、この終わりの時代にご自分の民が、天のカナンへの備えのために教えを受けることができるよう、謙遜な心と教えられやすい心をもって、古代イスラエルが通った火の試練を振り返ることを望んでおられる。

神の命令によって打たれ、いのちの水を湧き出させたあの岩は、打たれ傷つけられ、その血によって滅びゆく人の救いのための泉が備えられるようにされたキリストの象徴であった。岩が一度打たれたように、キリストも「多くの人の罪を負うために一度ささげられる」のであった。ところがモーセがカデシュで軽率にその岩を打ったとき、キリストの美しい象徴は損なわれた。私たちの救い主が再び犠牲とされることはない。大いなるささげものはただ一度だけであったのだから、その恵みの祝福を求める者は、イエスの名によって願い、悔い改めの祈りのうちに心の願いを注ぎ出すだけでよい。そのような祈りは万軍の主の御前にイエスの傷を差し出し、すると、渇くイスラエルのために流れ出た「いのちの水」によって象徴されている、いのちを与える血が新たに流れ出るであろう。

神への生ける信仰と、その命令への謙遜な従順によってのみ、人は神に認められる望みを持つことができる。カデシュでのあの偉大な奇跡の折、民の絶え間ない不平と反逆に疲れ果てたモーセは、全能の助け手を見失い、「岩に向かって語れ。そうすれば水を出すであろう」という命令に従わず、神の力を離れて激情と人間的弱さを露わにし、彼の記録に汚点を残すことになった。本来ならば、その働きの終わりまで清く、堅く、無私に立ち続けるべきであり、また立ち続けることもできた人が、ついに屈してしまった。本来なら神が尊ばれ、その御名があがめられるべき場で、イスラエルの会衆の前で神は辱められた。

直ちにモーセに下された宣告は、きわめて痛烈で屈辱的なもの—すなわち、反逆するイスラエルとともに、ヨルダンを渡る前に死なねばならないというものだった。だが、人は、主がそのただ一度の過ちのゆえにご自分のしもべを厳しく扱われたと主張できるだろうか。神は、当時生きていたほかのどの人にもまさる仕方で、モーセを重んじられた。幾度となく彼の偉業を擁護し、彼の祈りを聞き入れ、人が友と語るように

、彼と顔と顔を合わせて語られた。モーセが享受してきた光と知識に正比例して、彼の罪責は増したのである。『サインス・オブ・ザ・タイムズ』1880年10月7日。